

続

徒然
つれづれ

プアー感覚

桑野 巍

いつのころからか日本は経済大国といわれている。国民の所得水準も高いらしいというのに私自身は残念ながら「お金持ちになった」という夢さえまだ見たことがない。天邪鬼あまのじやくのケチケチ男で満足しているので、金持ちになった夢など見ようと思ったこともないのだ。

ところが、時折自宅に投資や保険など資産運用しないかとの親切な誘いの電話がかかってくる。聞いたこともない片仮名の社名を名乗り、商品説明したいという。折角だからと思って最初の30秒間ぐらいはお相手をするが恥ずかしながら元金が乏しいので「利殖、資産運用には興味がない」と答えると「お金を増やすのが嫌いなのですか」と突っ掛かってくる。そこで「用事があったらお宅に電話するから番号と代表者の名前を教えて」というと相手方はプツンと電話を切ってしまう。実に後味が悪い。

どこで電話番号を調べたのか知らないが、「世間からは金持ちに見られているのかな」と錯覚することもあるが、これは自慢にならない。恐らくこうした業者はどこかで会社関係や同窓会名簿などを取り寄せて、のべつ幕なしに電話を使って勧誘しているのだろう。仕事熱心といえなくもないが、こちらは迷惑至極だ。業者側には「セン3ツ」という言葉があるように、1,000の顧客対象を訪問したり、電話したりして、このうち3件が成約できれば御おんの字とでも考えているのだろうか。業者からの電話を受けた日は不愉快で、電話番号を変えた方がいいのかなという思いも持ち上がってくる。

これからの時代、投資をしないことはかえってリスクを伴うことになるという説もあるが、私は「甘言に乗るとロクなことがない」という姿勢だ。それでも民間研究機関の最近の調査によると、預貯金や株式などの純金融資産を一億円以上保有する「金持ち世帯」が平成17年時点で86万5千世帯あり、資産総額は213兆円になったという。世帯数は日本の全世帯の2%にも満たないが、純金融資産のシェアは18.4%を占めているらしい。景気回復による株高効果もあってということだろうが、なんだか“資産の

集中化現象”が進んでいるようにも思える。

われわれのような中流の下家庭では億とか兆とかの単位は勘定も想像もできない数字だが、純資産5億円以上の「超富裕層」が5万2千世帯もあると聞くと、やはり「おれはお金の話に疎いんだ」ではすまされず「ご立派」とか「羨ましい」という溜息も出る。半面「おれはお金の魔力から遠く離れていてよかった」とも思う。

自分の身の回りを見ると、簡易ガレージはあっても空き家状態だし、金の延べ棒も高級美術品も持たず、中流の下げに属するのだろうから、軽いデフレ時代が懐かしくなったりする。常に節電、節水など省エネに気配りし、多少便利と思える商品であっても unnecessaryな物は買わないというスタンスは変わらない。つまり戦中世代的なプアー感覚が抜けないのだ。

その昔、役人の中の一部には村の資産家の子息がいた。田畑や屋敷のほか溜池も所有していて、口の悪い貧乏記者はこの子息を「呑気な父さん」と呼んでいた。子息はおしゃれで腕時計が光っていた。記者が「スイス製？時価2万円ぐらい？」と聞いたら、リッチな子息は顔を歪め「甘いなあ、150万円ぐらい…」とせせら笑った。仕事の面では「血気にはやって新しい仕事は極力しない。去年のことを繰り返していれば絶対に問題は起きない」と先輩から教え込まれたと振り返り、それでもいろんな部署を経験させてもらい「ぼくたちは任務と責務を果たし、いま時の役人よりもいきいきしていた」と、昔を振り返り自信たっぷりの表情で話してくれた。

それではいま時の地方公務員はどうであろうか。それぞれの置かれている環境にもよろうが、時の流れは激しく、価値観は多様化し、財政は窮屈で“下を向いて歩こう組”が増えていないか気懸かりだ。だが「これでもか、これでもか」と働く“ハングリー組”も多く、この人たちは平然として超勤し、仕事にも自身の生活にも充実感を維持している「リッチ組」だ。その前向きさに期待したい。

（自治大阪編集委員会顧問）
時事通信社元大阪支社長